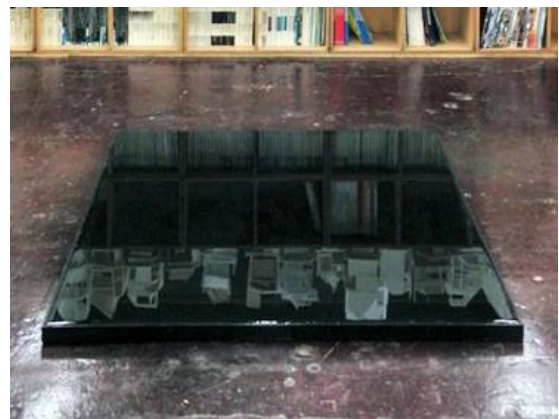


2021年6月から7月にかけて UNAC TOKYO で、ドイツ・フランクフルトを拠点に活動されている芸術家・那須秀至（Hide Nasu）さんの個展が開かれた。筆者にとって那須さんは、20年以上前に同地の芸大に留学していた頃からお世話になっている恩人でもあり、今回の個展も楽しみにして見に行った。会場には、和紙と蜜蝋を使った那須さん独自の手法で独特の奥行きが表現されたタブローや、約30cm角、厚さ4～5cmの檜板に水を張る「水鏡」の作品群が展示されていた。この「水鏡」は、那須さんが1990年代から取り組まれている題材で、数年前、私が勤める大学の研究室に、今回のものよりも大きいタイプのもを置かせて頂いたことがある。それは120cm角、深さ4cmの黒く漆塗された木製のお盆のような水盤に、水をギリギリまで張る作品で、別名「鏡池」ともいう。水盤に水を少しずつ注いでいくと、床面から絶妙な厚さで盛り上がった正方形の黒い面ができ、そこに周囲の風景が映り込む。それは単純な反射とは異なる不思議な現象で、床に突如、別世界への入口のような空間が開かれるという、那須さんらしい空間性が感じられる作品であった。

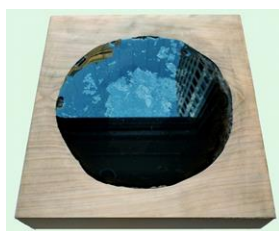
今回の「水鏡」は、水を張って風景を取り込むことは「鏡池」と同じだが、サイズも小さく素材感も違うせいか、かなり異なった性格を感じた。最初はその意味がよく分からなかったが、しばらく見ているうちに「鏡池」を研究室に長期間置いたときの奇妙な感覚を思い出した。「鏡池」を日々眺めていると、水面が空気の動きにつられて揺らめき、光り方も時々刻々と変化するので、だんだん作品自体が生きているような気がしてきたのである。また水は汚れたり蒸発して減っていくので、魚を飼っているわけでもないのに、時折水を足したり入れ替えたりしなければいけなかった。そうこうするうちに、作品を設置しているというよりも、何か不思議な生き物を「飼っている」ような感覚になっていた。こう書くと少々面倒臭そうだが、当時研究室にいた学生たちは、頼みもしないのに水を入れ替えてくれるなど、いつの間にかこの「鏡池」を飼うことを楽しんでいた。こうした感覚は、同じ作品をギャラリーで「鑑賞」したときのそれとは全く異なる興味深いものだった。



この体験を思い出しながら、今回ギャラリーに並んだ9ピースの「水鏡」を個々によく見ると、材の木目や厚さ、反り具合、塗装の有無、そして水を溜める表面の薄い窪みの形状などが微妙に異なり、それぞれに個性がある。またそのサイズ感がある意味絶妙で、ちょうど両手で持ち上げられる鉢植えか小動物に近い感覚もあり、各ピースを見比べているうちに、同じ種でも個体ごとに個性が違う不思議な生き物が陳列されているようにも見えてきて、なんだかアートギャラリーにいるというよりも、園芸店かペットショップにいるような錯覚に陥った。要するに「水鏡」は、「鏡池」で体験した奇妙な感覚、つまり人に「飼われる＝生かされる」作品のあり方へ、よりフォーカスしているように思えてきた。



考えてみれば、水を与えるという行為は「飼う」ことの原点である。例えばペットに水を与えると表情や態度が変わるように、水を注がれた「水鏡」は、周囲の風景を取り込んで表情を変え、不思議な像や空間を見せてくれる。そして水を与えるたびに、墨跡が年輪のように作品に刻まれ、新たな表情が加えられていく。こうした個性は、作家がコントロールしたものというよりも、様々な条件に応じてピースごとにほぼ偶然生まれているところや、この先の「飼い方」次第でいろいろな表情へと変わっていくことも生き物っぽい。



一瞬の驚きや感動とは異なり、「飼う」という行為自体がそもそも日常的で継続的な性格をもっている。人が家で草木を育てたりペットを飼ったりするのは、それらを育て、命を守ることが、翻って自分自身を励まし生かすことになるからだろう。では芸術はどうか？芸術は人の生活とともにあるべきだという言葉はよく耳にする。絵や彫刻などを時折眺めて感動するのも悪くはないが、那須さんの「水鏡」は違った在り方の可能性を示している。それは寡黙でありながら、水を与えると生き生きとした表情を見せ、そのことで人をそっと励ましてくれるような、繊細な生命感を宿している。そこには見るだけの視覚的表現や面映ゆいインタラクティブなどとは違う、芸術と人の、より自然で豊かなつながりが生み出されている気がする。



中井 邦夫 (なかい くにお)

神奈川大学工学部建築学科教授。

NODESIGN 共同主宰 (2003年～)。博士 (工学)、一級建築士。

1993年東京工業大学大学院修士課程修了。

1996-1997年シュテーデルシューレ造形芸術大学建築科 (ドイツ、フランクフルト)。

1999年東京工業大学大学院博士課程修了。

東京工業大学大学院助教、神奈川大学准教授を経て、2015年より現職。

日本建築学会作品選奨 (共同)、グッドデザイン賞 (共同)、都市住宅学会賞著作賞 (共著) など受賞

